

なにわホネホネ団の東北キャラバン実践報告 「きょうは1日、化石であそぼ！」 ～博物館コミュニティによる被災園館支援の可能性をさぐる～

なにわホネホネ団・東北遠征団／NPO 法人大阪自然史センター 西澤真樹子

被災地の人々に、大好きな博物館を届けたい…。大阪市立自然史博物館を拠点に活動する標本作製サークル・なにわホネホネ団は、2011年9月、11月の2回、岩手県沿岸部での出張子どもワークショップを開催した。アンモナイトのレプリカ作り、岩手の古生物はり絵、三陸出身の博物学者鳥羽源藏の記録から再現した「昔の岩手の貝遊び」などを楽しむイベントには、5市町6カ所の会場で1,040名が訪れた。現在は、宮城県気仙沼市・南三陸町での開催に向け調整が進んでいる。

博物館で活動するサークルとして「被災した博物館のスタッフと利用者を応援したい」というホネホネ団員の思いからはじまった活動は、本拠地の大阪市立自然史博物館を巻き込んで、博物館や町の復旧を地元の素材に合わせた楽しいイベントの企画・開催で応援する…という活動に育ちつつある。開催までのいきさつと当日の様子、今後の展開について報告したい。

「やっぱり、同じ博物館のなかまを応援したい」

大震災の翌日、団員である高校生が「学校で募金活動を始めたいがどうしたらよいか」とメーリングリストに投稿したのをきっかけに、ホネホネ団としても何か支援活動をしたいと話題が飛び交った。そして、同じ博物館のサークルとして、博物館を応援しようと方針がきまったのが3月15日日。その後、拠点である大阪市立自然史博が義援金を集める動きがあると知り、まずは私たちもそこに連携し、

募金とバザーを行うことにした。

とはいえ、できるだけ被災地に近いところにいる方とつながって現地のニーズを知る事ができないだろうか。こちらの想いを伝えて、できることがあればお手伝いしたい気持ちは募っていった。4月、震災関係の助成金があちこちで公募されはじめたので、以前花王株式会社のミュージアム支援の事業で交流のあった岩手県の子育て支援サークル「あそびma・senka」さんにメールを送り、こちらの意思を伝えた。助成金をとり、必要ときに「共催」の形で使えないだろうか。申請や報告などの作業は一切こちらでするし、こちらの博物館の子どもワークショップの出前もできると思うがどうか、と提案した。すると、現場は人手不足でスタッフは疲労している。心身ともにストレスを抱えている親子のために、安心・安全な空間作りをしてあげたいがマンパワーが不足してきていない。助成金は旅費にして、来て下さるなら「社会教育のネットワークを活かして、開催場所のコーディネートなどでがんばります」と現地のカウンターパートを引き受けてくださった。

博物館との協力体制を作る

こうした呼びかけとあわせて、被災標本レスキューをはじめとした支援に関わっていた学芸員やスタッフ有志と数回のミーティングを行い、それぞれの動き方について話し合った。子ども向けワークショップは、私たちホネホネ団だけでは力不足なため、友の会が母体となって設立されたNPO法人大阪自然史センター

に協力を依頼した。その結果、ワークショップの企画と準備のサポート、往復の交通費・滞在費はホネホネ団持ちで当日に3名のスタッフを出張扱いで出してもらうことで話がまとまった。学芸員サイドからは、博物館としてこの活動を認めるよう、学芸会議にかけて承認をいただいた。私たちは普段から博物館と密接にかかわって活動しているため、こうしたやり取りは大変スムーズだった。あわせて数件の助成金を申請し、資金の確保に動いた。

岩手ならではのプログラムを考える

大阪市立自然史博物館の子どもワークショップは、子どもたちが博物館に親しめるよう構成されたものだが、岩手で開催するならば岩手なりのテーマが必要だろうと、企画スタッフで検討を重ねた。

岩手といえば化石が有名。日本初の恐竜モシリユウや、日本最古のアンモナイト発見の地でもある。5月には久慈で翼竜の腕の部分が発掘されるという最新情報もあった。また、宮沢賢治とも交流のあった博物学者・鳥羽源藏先生の生地でもある。鳥羽先生が1930年の貝類学会誌に投稿していた「貝に関する二三の遊戯」という、資料が見つかり、この80年前の子どもの遊びを再現してはどうかというアイデアが出た。郷土の偉人や昔の遊びは年配の方にも喜んでもらえるかもしれない。貝ならば、漁業が復旧したらすぐに材料が手に入るだろう。化石はきっと子どもにも大人にも広く喜ばれるはず…。

何よりも、震災があってもなくても変

わらない岩手が誇る地域の財産をテーマにすることで、郷土への愛着を感じてもらえたらうれしいし、それは地域の自然の記憶を保管する施設である「博物館」の再開に向けた支援につながるかもしれない。どうせならいくつものワークショップ屋台をめぐる、スタンプラリー形式はどうだろう。

こうして、「はりはり化石はりえ」「べたべた化石バッグ」「アンモナイトのレプリカストラップ」「空飛ぶ化石絵はがき」「岩手のむかしの貝遊び」の5つのワークショップをめぐるプログラムが完成した。「電気は使わない」「場所と机以外なるべく借りない」「サーカス団のようにすべて持ち込んで、終わったら全部片付けて帰る」をコンセプトに、準備した荷物は約300kg。350名分の体験セットと大量の材料、飾り付けの道具、画材、絵本や着ぐるみを岩手に送り出した。

大盛況の会場と、参加者・関係者の声

9月16日、スタッフの予行練習をかねた小さなワークショップを遠野市の児童館で行い、17日、会場の下閉伊郡山田町に向かった。入場者は一日中途切れず、参加者は280名。18日は新聞に掲載されたこともあり、会場の大船渡市立博物館には人があふれ、一日で320名が訪れた。山田町の参加者からは「子どもが帰ってきたチラシを冷蔵庫にはって、あと何日だねって楽しみにしていたんです」「何かをもらうんじゃなくて、こういうのははじめて」と好評。岩手では8月末で避難所が解散し、すべての人がひとまず仮設住宅に入った直後でもあり、タイミングも良かったようだ（避難所では行動が筒抜けで自由に出かけにくい雰囲気があったそうだ）。イベントを共催した子育て支援サークルや町の職員さんからも「日常に追われて子どものための時間を作りたいでも作れなかったが、今日は本当に良かった」と評価していただいた。山田

町では隣りの大槌町で活動するNPOから「次は大槌で開催できないか」とオファーをいただいた。これを受け、第2回開催を検討し、大槌町と合わせ、鳥羽源藏先生の生地である陸前高田市が会場に確定した。

陸前高田市は、市立の二つの博物館が被災した。現在、館の復旧に向けて日々膨大な資料の修復を続けている。会場の入口にこうした活動を伝えるコーナーを設けられたらと、市立博物館学芸員の熊谷賢さんからパネルをお借りして展示した。当日は熊谷さんもスタッフに加わり、参加した子どもたちに「この近くにアンモナイト出る山があるの知ってるか？すげえんだぞ」「また博物館できたら、化石掘りに行こうな」と声をかけられていたのが印象的だった。この会場では、地元のNHK放送を見て“ほんものの鳥羽源藏先生のお孫さん”が来場されるというサプライズもあった。私は源藏先生コーナーで使う子どものための小冊子に解説イラストと先生の似顔絵を描いていて、会場のあちこちにもそれが貼りまくってあったのだが、登場したお孫さんはその似顔絵にそっくり。恥ずかしいやらありがたいやらでソワソワしてしまった。

翌日の大槌町には、震災直後に子ども支援に入っていたボランティアさんが訪れ「避難所だったこの公民館は廊下にも人があふれていて、寝ても覚めても子どもたちが怒られている姿しか見ていなかった。あまりに雰囲気が悪くてびっくりした」と声をかけてくれた。

どの会場でも、参加者に「岩手って化石がいっぱい出るすごいところだよ」と話すと、「えーっ？」と照れくさそうに笑ったり驚いたりする。よその人から自分の土地をほめられるのは、やっぱり誰でもうれしいのだろう。被災地支援にはいろいろなやりかたがあるだろうけれど、直接なぐさめるのではなく、素敵なお話を聞かせてほめる、という方法はこちらも楽しく、良かったなと思っている。

楽しいワークショップを手に 沿岸全部をまわりたい

今回の遠征の目標は、東北で出会ったみなさんに「ホネホネ団、来られない？」と気軽に呼んでもらえる関係を作ること。そのねらいは、2012年2月現在、ゆっくり形になりつつあるように思う。岩手の博物館から普及行事の協力への打診があったり、宮城県気仙沼市と南三陸町では次回の開催も計画されたりしている。気仙沼は地元出身の方でつくるNPO法人気仙沼復興協会さんがカウンターパートとして手を挙げてくださった。南三陸町は町立の「志津川ネイチャーセンター」の復活プロジェクトの盛り上げ役として、記念の親子イベントを担当する予定だ。新しい施設のシンボルになるサケやダンゴウオ、クチバシカジカといった志津川湾の生きものたちをテーマにしたプログラムを検討中である。

若いお母さんから聞いた「子どもと週末行くところがない。土曜日の午後になるとどうしようって悩む」という状況は、これからはしばらく続くだろう。声をかけられたら、依頼のあった土地に合わせたプログラムをじっくり準備し、地元の学生や子どもスタッフも集めて、関わる人々みんながよかったと思えるような、楽しい時間を作り上げたい。

「博物館をとりまく人々」による被災園館の支援の試みはまだ始まったばかり。小さくても確実に相手が喜ぶ活動を積み重ねながら、次にどんな展開が訪れるのか。遠征団一同楽しみにしている。
(にしざわ・まきこ)

- ◆3/17 南三陸町自然環境活用センター（志津川ネイチャーセンター）復活プロジェクト <http://blog.canpan.info/marinelearning/>
- ◆なにわホネホネ団公式ウェブサイト <http://www.geocities.jp/naniwahone/>



あくあびあ芥川（大阪府高槻市）は、会場に飾るメッセージカードを作るイベントを企画してくれた



会場になった高台のテントから見る被災した町並（岩手県山田町）



化石スタンプをベタベタおして作るオリジナルバッグ（山田町）



受付。町のお祭りであったこの日、舞の衣装のまま遊びにきた中学生（山田町）



化石ってどうやってできるのかな？のお話（山田町）



でっかいきょうりゅうと記念撮影コーナー（大槌町）